

エゾアワビ (あわび)



生態的特徴等

【生態】アワビの仲間は日本全国の沿岸に生息し、茨城県では北方系のエゾアワビが分布する。餌となる大型の海藻が豊富な場所を好み、県内では北茨城市～大洗町までの浅海岩礁域に生息する。秋に海中で産卵し、孵化直後は浮遊幼生として生活する。1週間ほどの浮遊生活を送った後、海底に着底し親貝と同様の底生生活に移行する。県の栽培漁業の対象種であり、栽培漁業センターで育てた3～3.5cm(2歳)の稚貝は、放流後3～4年で11cmの漁獲サイズになる(図1)。漁獲物のうち、約半分を人工種苗由来の貝が占めていると試算される。

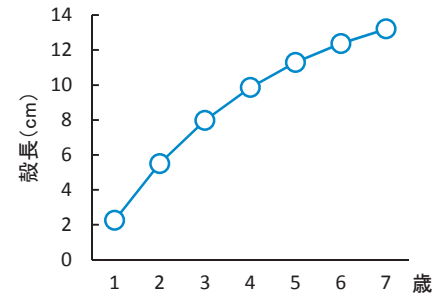


図1 エゾアワビの成長

【漁法と盛漁期】茨城県では6月から10月に潜水漁業によって漁獲される。県の漁業調整規則により、漁獲可能なサイズは11cm以上に制限されている。

【利用】プライドフィッシュ(夏)に選定されている。高級食材であり、料亭、旅館に卸されるほか、乾物(干鮑)に加工した物は輸出もされている。刺身のほか、酒蒸し、バター焼き等で食される。

人工種苗放流の中断による資源減少を懸念

(漁獲量) H10年代以降、年間10～30トンの漁獲で推移していたが、東日本大震災の影響により人工種苗の放流量が減少したことを受け、自主的な取り控えが行われている。H28年は3.5tまで低下したが、H29年の漁獲量は10tであった(図2)。

(加入量) 例年約30万個の人工種苗が放流されていたが、震災の影響によりH23、24年は中断、H25、26は10万個であった。H27年以降は30万個の放流が再開されている。

(水準と動向) 資源水準は近年の漁獲量(図2)から「低位」、動向は直近5ヶ年のCPUEの傾向(図3)から「横ばい」とした。なお、上記のとおり取り控えも行われており、必ずしも実際の資源状態を反映するものとは限らない。また、放流の再開により、H30年以降は徐々に資源が回復していくと考えられる。

水準



動向

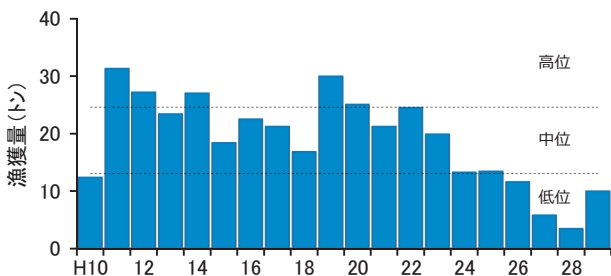
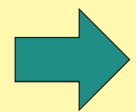


図2 アワビ漁獲量の推移(漁協調査による)

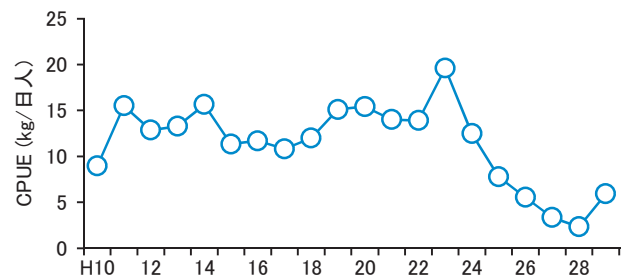


図3 エゾアワビのCPUE

【全国の漁獲動向】岩手県が全国1位。ほかにエゾアワビ漁獲地域は宮城県、青森県、北海道、クロアワビ、マダカアワビ、メガイアワビ等暖流系アワビ漁獲地域では千葉県、長崎県などが上位に入る。

評価期間：平成29年6～10月 更新日：平成30年11月1日